

# 人はなぜ募金をするのか？

## —性別及び類似性が募金行動にもたらす影響—

大川 朝世<sup>1</sup>・小河 妙子<sup>2</sup>

(1, 2 : 東海学院大学人間関係学部心理学科)

### 要 約

被潜在的援助者（被援助者）の特徴が、潜在的援助者（援助者）の行動に影響することが分かっている。本研究では、援助行動の中でも募金行動に焦点を当てた。研究Ⅰでは、困窮者自身が募金要請を行う場合と困窮者と募金要請者が類似する場合、及び募金要請者の性別、募金者の性別による影響を検討した。研究Ⅱでは、募金要請者の子どもの生死を要因に加え、募金要請者の性別と募金者の性別で差異があるかを検討した。その結果、第一に、過去の募金経験の有無が募金行動に影響することが明らかとなった。募金経験のない者はある者に比べて、募金意思、規範意識、同情が低く、普段の援助行動も少ない。さらに、過去の募金に対する自発性の高さは、募金額、同情、普段の援助行動とは関係が認められなかった。また、普段から援助を行わない者は、被援助者の死などのネガティブな情報に規範意識が働き、助かったなどのポジティブな情報には規範意識が働かないことが示唆された。第二に、困窮者と募金要請者と募金者との関係性が募金に影響することが明らかとなった。募金要請者が困窮者と類似した人物で子どもが死亡している場合、同性よりも異性の方が募金者の募金意思が高い。男性募金者は、募金要請者の子どもが活着している場合では、女性要請者よりも男性要請者に対して募金意思が高くなるが、死亡している場合では、反対に男性要請者よりも女性要請者に対して募金意思が高くなる。結論として、困窮者本人が募金を要請するよりも、募金要請者が困窮者と類似した人物の状況や募金者及び募金要請者の性別の組み合わせによって募金意思が高くなることが示された。

キーワード：募金、援助行動、募金要請、規範意識、同情、向社会的行動

### はじめに

援助行動 (helping behavior) とは「他者が身体的に、また心理的に幸せになることを願い、ある程度の自己犠牲 (出費) を覚悟し、人から指示、命令されたからではなく、自ら進んで (自由意志から)、意図的に他者に恩恵を与える行動である。」と定義されている (高木, 1998)。この援助行動が多くみられるようになったのは、1995年の阪神・淡路大震災以降である。また、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震でもボランティア活動が盛んである。ボランティアは、被災地に行き支援するだけではなく、被災地に行かずとも支援することが可能である。その一つが募金活動である。

高木 (1982) は、援助行動を七つに分類している。①寄付・奉仕行動、②分与・貸与行動、③緊急事態における救助行動、④労力を必要とする援助行動、⑤迷子や遺失者に対する援助行動、⑥社会的弱者に対する援助行

動、⑦小さな親切行動である。そして、募金は、「寄付・奉仕行動」に分類される。

人はどのような場合に募金をするのだろうか。経済的に余裕がある場合に募金するのであろうか、または、困っている人を放っておけない性格であるから募金するのであろうか。高木 (1998) は、潜在的援助者 (援助を行う可能性のある人) の「寄付・奉仕行動」の促進要因 (援助が起こりやすい) と抑制要因 (援助が起こりにくい) の特徴について、各三要因を示している。

促進の三要因は次のとおりである。第一に、援助規範を内在化し、それを指示する援助を行う責任を積極的に受容している。そして、それを実行する能力を備えている。第二に、援助の成功経験があり、良い気分になったことがある。または、援助を受け、助かった経験があることである。第三に、援助的性格を持っており、潜在的被援助者 (援助を受ける可能性がある人) に関心を向け

## 人はなぜ募金をするのか？

やすいよい気分・感情状態ある。そして、潜在的被援助者が助けてあげたいと思わせる好ましい特徴を持っていることである。

一方、抑制の三要因は次のとおりである。第一に、援助の失敗により、嫌な気分になったことがある。または、援助要請が拒否された経験があったり、援助されたことにより事態が悪化したりした経験ある。第二に、援助を求める原因を潜在的被援助者に帰属し、潜在的被援助者自身に解決することを期待し、非援助に伴うと予想されるサンクションを軽視している。第三に、援助を実行するだけの能力や資格に欠けていることである。

以上をまとめると、援助規範を内在化し、それを実行する能力があり、好意的な援助経験がある。そして、潜在的援助者の状況や潜在的被援助者の特徴などから「寄付・奉仕行動」が起こるとされる。これらのことから、潜在的援助者（潜在的被援助者）により、援助に差異があることが知られている。本研究では、援助要請者（募金要請者）の違いが援助にどのような変化をもたらすか検討することを目的としている。

### 本研究に関する先行研究

Hannah & Midlarsky (1989) は、募金率と募金額が募金要請者の状態や募金者の年齢によって異なるかについて調査を行っている。多くの年代の人たちが週末に出かけると考えられる場所（商店街・公園など）で、募金要請者の女性3名が偶然に居合わせた5歳以上（観察者が募金者の年齢を判定）の方を対象に、実際のお金を用いた募金要請を行った。従属変数は、出産時の障害をもつ子どものための基金に募金する行動（募金率や募金額）であった。独立変数は、募金要請者の状態（妊娠しているか、していないか）と募金者の年齢であった。

その結果、募金要請者が妊娠中ではない条件で募金要請をした場合、全体で募金率が45%であったのに対して、妊娠中の条件では募金率が55%であった。また、募金額に関しても全体で妊娠中ではない条件（平均61セント）よりも妊娠中の条件（平均75セント）の方が高いことが明らかとなった。また、募金者の割合は、74歳までは年齢とともに上昇するが75歳以上になると下降し、募金額は、64歳以上までは年齢とともに上昇し、それ以降は下降することが明らかとなった。

大川 (2016) は、Hannah & Midlarsky (1989) の結果について、募金要請者（妊娠中）が困窮者（出産時に障害をもつ子ども）と類似しているため、潜在的募金者

への影響力が強まり、募金行動を喚起しやすくなるのではないかと考えた。そこで、募金要請者が困窮者と類似しているときに募金率及び募金額が増えることを検証するために場面想定法を用いた質問紙調査を実施した。また、募金要請者の性別による差異も併せて検討した。心臓病で手術が必要な子どものために募金する次の4つの行動を従属変数とした。「募金意思（実際の募金行動ではないため、募金率を募金への意思に変更した）」（もし現実にこのような場面に遭遇したらあなたは募金しますか。）、「募金額」（もし募金するとしたらいくらくらいですか。0円から5千円の間でお応えください。）、「規範意識」（あなたは花子ちゃんを助けるためにどれくらい協力すべきだと思いましたか。）、「同情」（あなたは花子ちゃんにどれくらい同情をしましたか。）。独立変数は、募金要請者が、自身の子どもの同じ病気にかかり死亡した条件と困窮者と関わりのないボランティア要因（類似高群・低群）×募金要請者の性別要因（男性・女性）であった。募金意思の評定値に関するボランティア要因と募金要請者の性別要因の2要因分散分析の結果、交互作用に有意傾向が見られ、女性においてのみ類似度低条件よりも高条件で評定値が高かった。

また、各質問項目間の相関分析の結果、規範意識と同情に有意な正の相関 ( $r = .60$ ) があった。つまり、規範意識が高い場合、同情も高いといえる。また、募金意思と規範意識で正の相関 ( $r = .31$ ) に有意な傾向が見られた。募金するかどうかは、規範意識の影響が示唆された。高木 (1998) では、男性よりも女性の方が援助されやすいことが認められている。そのため、女性条件の場合に規範意識が強く喚起され、類似要因（亡くなった子ども）に強く意識が向けられ、募金意思に差が生じた。反対に、募金要請者が男性の場合には、規範意識があまり喚起されないため、類似要因に意識が向けられにくく、類似要因による差が生じない。また、相関分析の結果から、規範意識が強く喚起されると同情が強く生じることも影響要因として考えられる。すなわち、募金要請者が女性であり困窮者との類似性が高い場合、募金者の規範意識が強く喚起され、かつ同情が強く生じ、募金意思が高くなると考えられる。

以上から、大川 (2016) は、Hannah & Midlarsky が報告した募金率において、募金要請者が妊娠中ではない条件よりも妊娠中の条件で高い結果であったのは、募金要請者が妊娠中の女性であったために、募金要請者の性別（女性）と困窮者との類似性が複合して影響した結

果ではないかと結論付けた。また、募金意思と向社会的行動の負の相関から、普段から向社会的行動を行っている人ほど募金意思が低い傾向が示唆された。しかし、向社会的行動の高低群における調査参加者の性別構成を調べてみたところ、高群は低群よりも有意に女性参加者が多かった。Schwartz (1973) によれば、潜在的援助者が男性で、援助要請者が自分と同じ人種の場合、男性よりも女性に対して援助率が高い結果となった。しかし、潜在的援助者が女性で、援助要請者が自分と同じ人種の場合、性別を問わず同程度の援助率だったことが明らかとなった。このことから、大川 (2016) は、向社会的行動低群は、高群よりも相対的に男性が多かったため、女性である募金要請者に対する援助行動として募金意思が増加した可能性があり、その結果、向社会的行動得点と募金への意思評価点の間に負の相関がみられるという一見矛盾する結果となったのではないかと結論付けた。

## 本研究の目的

大川 (2016) では、困窮者と募金要請者を分け、募金要請者が、自身の子どもが同じ病気にかかり死亡した条件と困窮者と関わりのないボランティア条件を設定した。その結果、募金要請者の性別と類似性が交互作用し、募金意思に影響した。しかし、困窮者と募金要請者に類似性がある場合と、困窮者本人が募金要請を行う場合、どの程度差異があるのか分からない。また、規範意識と同情に有意な正の相関があり、募金意思と規範性にも正の相関に有意傾向が見られた。さらに、募金要請者が女性の場合に募金意思に影響を及ぼすことが明らかとなった。この結果は、募金要請者が女性で困窮者と募金要請者が同じ人物の場合に、困窮者と募金要請に類似性がある場合よりも同情し、規範意識が高くなり、募金意思も併せて高くなることを示唆する。つまり、女性で困窮者と募金要請者が同じ人物の場合の方が、募金意思が

高くなると考えられる。さらに、大川 (2016) の研究で不十分であった、募金者の性別による差異の検証も行う。

以上から、本研究では、次の仮説を検証する。

仮説 1：困窮者と募金要請者が同じ条件（以降、「本人条件」と表記する）と類似性がある条件（以降、「類似条件」と表記する）では、本人条件の方が募金額と募金意思が高くなる。

仮説 2：女性要請者と男性要請者では、女性要請者の方が募金額と募金意思が高くなる。

仮説 3：女性要請者の場合、男性募金者と女性募金者では、男性募金者の方が募金額と募金意思が高くなる。

仮説 4：男性要請者の場合、男性募金者と女性募金者では、女性募金者の方が募金額と募金意思が高くなる。

ただし、本研究では場面想定法を用いた調査を行い、実際の募金行動を測定するわけではない。そのために、実際の募金率ではなく、募金意思を従属変数とした。また、大川 (2016) の研究では、困窮者は手術が必要な子どもであったため、子ども自身が募金要請者になることが不自然である。そこで、本研究では、困窮者と募金要請者が同じ条件では、困窮者は子どもの両親とする。

## 研究 I

### 方法

**調査参加者** 参加者は、学生 77 名（男性 44 名、女性 32 名（不明 1 名）、平均年齢 = 19.33  $SD$  = 4.91）であった。2017 年 6 月に実施した。また、書面および口頭にて十分なインフォームドコンセントを行い、同意を得た上で実施した。

**調査計画** 募金要請者の性別要因（男性 - 女性）×募金要請者と困窮者要因（同じ - 類似）×調査参加者の性別要因（男性 - 女性）による 3 要因参加者間計画であった。条件ごとに募金要請場面のシナリオを作成し、

表 1 研究 I で実際に用いた刺激文

男性要請・本人条件	<p>あなたが駅前を通りかかったとき、30歳くらいのスーツ姿の男性が1人で募金活動をしていました。 「6歳になるうちの娘の花子が、拘束型心筋症という心臓がだんだんと硬くなっていくという病気で苦しんでいます。このままだと、来年はランドセルを背負って学校に行くことができません。」 どうやら募金を呼びかけている男性は、花子ちゃんの父親で、娘のために募金を呼びかけているようです。男性は、続けてこう呼びかけました。 「娘を助けるためには、アメリカで心臓の移植手術を受けるしかありません。その費用には1億円が必要で、現在、7千万円ほど集まりました。あと3千万円で娘は手術を受けられます。娘のためにどうか募金へのご協力をお願いします。」 あなたが自分の財布の中身を確認したところ、小銭も合わせて5千円くらい入っていました。</p>
女性要請・類似条件	<p>あなたが駅前を通りかかったとき、30歳くらいのスーツ姿の女性が1人で募金活動をしていました。 「6歳の花子ちゃんという女の子が、拘束型心筋症という心臓がだんだんと硬くなっていくという病気で苦しんでいます。実は私の娘の陽子も同じ病気にかかっています。しかし、手術を受けられずに亡くなりました。」 どうやら募金を呼びかけている女性の娘（陽子ちゃん）が、花子ちゃんと同じ病気にかかり、亡くなったようです。女性は、続けてこう呼びかけました。 「花子ちゃんを助けるためには、アメリカで心臓の移植手術を受けるしかありません。その費用には1億円が必要で、現在、7千万円ほど集まりました。あと3千万円で花子ちゃんは手術を受けられます。花子ちゃんのためにどうか募金へのご協力をお願いします。」 あなたが自分の財布の中身を確認したところ、小銭も合わせて5千円くらい入っていました。</p>

## 人はなぜ募金をするのか？

参加者に読ませた上で質問項目への回答を求める場面想定法を用いた。

**刺激文** 表1に研究Iで用いた刺激文の例を示す。要請者が女性の場合では、「男性」を「女性」に、また、「父親」を「母親」に変えた。

各シナリオを読み終えた後に、「募金意思」、「募金額」（0円から5千円の間で回答）、「規範意識」、「同情」、「募金の経験」（実際に過去募金をした経験はありますか。）、「過去の募金への自発性」（Q5に（ある）と回答した方に質問です。過去に行った募金は、自ら進んで積極的に募金しましたか。）を質問した。「募金額」は自由回答、「募金の経験」は2件法、それ以外は5件法で求めた。さらに、性格特性としての援助傾向の影響も分析するために、向社会的行動尺度（大学生版、20項目；菊池、1988）を用いた。

**手続き** 講義終了後15分間で実施し、その場で回収した。調査協力の依頼をした後、各シナリオと質問項目からなる質問紙を無作為に配布し、口頭と書面で説明を行った。質問紙は、調査協力のお願ひ、個人情報取り扱いと保護、個人情報の記入欄、シナリオ及びシナリオに関する質問、向社会的行動尺度の質問項目、自由記述欄であった。

## 結果

教示に従わない不備のある回答、記入漏れによる不明回答が二つ以上ある場合は分析対象としなかった（男性4名（各条件1名）、女性1名（男性要請-本人条件1名））。また、募金額において外れ値（4000円（女性要請-類似条件1名）、2000円（男性要請-類似条件1名）と判定されたものは、募金額のみ取り除き分析を行った。募金額に関して、「〇〇～〇〇円」などのように範囲で示された回答では、中央値とした（研究IIでも同様とした）。

募金経験ありと募金経験なしの人数が大きく異なっ

た。そのため、募金意思・募金額・規範意識・同情の4変数について、募金経験あり群となし群の差異を調べるため、対応のないt検定を行った。

募金意思では、募金経験あり群（ $M=3.50, SD=1.12$ ）は、なし群（ $M=2.33, SD=1.01$ ）よりも有意に評定値が高かった（ $t(69)=3.61, p<.001$ ）。募金額では、募金経験あり群（ $M=346.47, SD=366.88$ ）となし群（ $M=272.14, SD=400.29$ ）には有意差はなかった（ $t(65)=0.65, n.s.$ ）。規範意識では、募金経験あり群（ $M=3.70, SD=0.82$ ）は、なし群（ $M=2.53, SD=1.31$ ）よりも有意に評定値が高かった（ $t(69)=4.17, p<.001$ ）。同情では、募金経験あり群（ $M=3.41, SD=0.94$ ）は、なし群（ $M=2.60, SD=1.36$ ）よりも有意に評定値が高かった（ $t(69)=2.64, p<.01$ ）。向社会的行動では、募金経験あり群（ $M=53.20, SD=13.87$ ）は、なし群（ $M=42.00, SD=11.79$ ）よりも有意に評定値が高かった（ $t(69)=2.82, p<.01$ ）。

以上のことから、募金額を除いて、募金経験あり群はなし群よりも有意に募金に対する意思があり、規範意識も高く、同情し、援助を多く行っていることが明らかとなった。そして、募金経験あり群となし群の差異が大きいこと、また、なし群の人数が少ないことから、以降の分析ではあり群のみを分析対象とした。

## 分散分析

表2は、4変数に対する各条件の平均値とSD及び参加者人数である。募金要請者の性別（以降、「要請者性別要因」と表記する）、本人条件と類似条件（以降、「要請者性質要因」と表記する）、調査参加者の性別（以降、「参加者性別要因」と表記する）による影響を調べるために、各従属変数について3要因分散分析を行った。

**募金意思** 要請者性別要因（ $F(1, 48)=0.03, n.s., \eta^2=.00$ ）、要請者性質要因（ $F(1, 48)=0.03, n.s., \eta^2$

表2 研究Iの各項目の平均値とSD及び各条件の参加者人数

	男性要請-本人条件 (21)		女性要請-本人条件 (18)		男性要請-類似条件 (20)		女性要請-類似条件 (18)									
	男性参加者 (10)	女性参加者 (10)	男性参加者 (9)	女性参加者 (9)	男性参加者 (14)	女性参加者 (6)	男性参加者 (11)	女性参加者 (7)								
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD								
募金意思	3.75	0.89	3.43	1.27	3.60	1.52	3.40	1.34	3.00	1.25	4.00	0.71	4.11	0.60	2.86	1.22
募金額	543.00	435.14	301.43	249.70	223.00	436.31	440.00	371.48	341.20	456.55	313.75	457.99	368.75	349.43	217.14	264.62
規範意識	3.88	0.99	3.86	0.38	3.20	1.10	3.20	0.45	3.60	1.17	3.80	0.45	3.89	0.93	3.86	0.38
同情	4.00	0.53	3.57	1.13	3.40	1.14	3.40	0.89	3.10	1.20	3.80	0.45	3.22	0.97	3.00	0.82

= .00) , 参加者性別要因 ( $F(1, 48) = 0.40$  *n.s.*,  $\eta^2 = .01$ ) に主効果は認められなかった。また、要請者性別要因と要請者性質要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 48) = 0.01$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。同様に、要請者性質要因と参加者性別要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 48) = 0.05$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。しかし、要請者性別要因と参加者性別要因の交互作用が有意傾向であったため ( $F(1, 48) = 3.01$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .05$ ) , 要請者性別要因と参加者性別要因の単純主効果の検定を行った。その結果、要請者性別要因の男性募金者 ( $F(1, 48) = 1.39$  *n.s.*,  $\eta^2 = .03$ ) , 要請者性別要因の女性募金者 ( $F(1, 48) = 1.62$  *n.s.*,  $\eta^2 = .03$ ) , 参加者性別要因の男性要請者 ( $F(1, 48) = 0.66$  *n.s.*,  $\eta^2 = .01$ ) , 参加者性別要因の女性要請者 ( $F(1, 48) = 2.61$  *n.s.*,  $\eta^2 = .05$ ) に有意な差は認められなかった。

また、要請者性別要因と要請者性質要因と参加者性別要因の交互作用が有意傾向であったため ( $F(1, 48) = 3.73$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .07$ ) , 細分化し、分析を行った。

要請者性別要因 (男性要請者, 女性要請者) における要請者性質要因と参加者性別要因の影響を調べるために、2 要因分散分析を行った。その結果、男性要請者の要請者性質要因に主効果はなかった ( $F(1, 26) = 0.05$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。同様に、男性要請者の参加者性別要因の主効果もなかった ( $F(1, 26) = 0.68$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .02$ )。さらに、男性要請者の要請者性質要因と参加者性別要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 26) = 2.56$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .09$ )。また、女性要請者の要請者性質要因に主効果はなかった ( $F(1, 22) = 0.00$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。女性要請者の参加者性別要因にも主効果はなかった ( $F(1, 22) = 2.53$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .10$ )。さらに、女性要請者の要請者性質要因と参加者性別要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 22) = 1.33$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .05$ )。

要請者性質要因 (本人条件, 類似条件) における要請者性別要因と参加者性別要因の影響を調べるために、2 要因分散分析を行った。その結果、本人条件の要請者性別要因に主効果はなかった ( $F(1, 27) = 0.03$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。同様に、本人条件の参加者性別要因に主効果はなかった ( $F(1, 27) = 0.11$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。さらに、本人条件の要請者性別要因と参加者性別要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 26) = 0.01$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。また、類似条件の要請者性別要因の主効果もなかった ( $F(1, 27) = 0.00$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。同様に、

類似条件の参加者性別要因に主効果は認められなかった ( $F(1, 27) = 8.92$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。しかし、類似条件の要請者性別要因と参加者性別要因の有意な交互作用が見られた ( $F(1, 27) = 8.92$ ,  $p < .01$ ,  $\eta^2 = .25$ )。そのため、類似条件の要請者性別要因と参加者性別要因の単純主効果の検定を行った。その結果、類似条件の要請者性別要因の男性募金者で有意な差が見られた ( $F(1, 27) = 5.69$ ,  $p < .05$ ,  $\eta^2 = .16$ )。同様に、類似条件の要請者性別要因の女性募金者で有意な傾向が見られた ( $F(1, 27) = 3.71$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .10$ )。また、類似条件の参加者性別要因の男性要請者で有意な傾向が見られた ( $F(1, 27) = 3.24$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .09$ )。同様に、類似条件の参加者性別要因の女性要請者で有意な差が見られた ( $F(1, 27) = 6.03$ ,  $p < .05$ ,  $\eta^2 = .17$ )。

参加者性別要因 (男性募金者, 女性募金者) における要請者性別要因と要請者性質要因の影響を調べるために、2 要因分散分析を行った。その結果、男性募金者の要請者性別要因に主効果は認められなかった ( $F(1, 28) = 1.53$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .05$ )。同様に、男性募金者の要請者性質要因に主効果は認められなかった ( $F(1, 28) = 0.09$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。さらに、男性募金者の要請者性別要因と要請者性質要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 28) = 2.63$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .08$ )。また、女性募金者の要請者性別要因に主効果は認められなかった ( $F(1, 20) = 1.44$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .06$ )。同様に、女性募金者の要請者性質要因に主効果は認められなかった ( $F(1, 20) = 0.00$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。さらに、女性募金者の要請者性別要因と要請者性質要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 20) = 2.63$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .06$ )。

以上から、次の四点が明らかとなった。第一に、類似条件で男性募金者の場合、女性要請-類似条件 ( $M = 4.11$ ) は男性要請-類似条件 ( $M = 3.00$ ) よりも募金意思が高いことが明らかとなった。第二に、類似条件で女性募金者の場合、男性要請-類似条件 ( $M = 4.00$ ) は女性要請-類似条件 ( $M = 2.86$ ) よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。第三に、男性要請-類似条件の場合、女性募金者 ( $M = 4.00$ ) は男性募金者 ( $M = 3.00$ ) よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。第四に、女性要請-類似条件の場合、男性募金者 ( $M = 4.11$ ) は女性募金者 ( $M = 2.86$ ) よりも募金意思が高いことが明らかとなった。

**募金額** 3 要因分散分析の結果、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった。

人はなぜ募金をするのか？

表3 自発性と向社会的行動の平均値とSDおよび人

	高群		低群		t値
	M	SD	M	SD	
<b>募金経験の自発性</b>					
人数(56)			23		
募金意思	3.94	0.81	2.87	1.19	3.92 ***
募金額	393.42	376.09	280.32	342.74	1.10
規範意識	3.76	0.85	3.61	0.77	0.66
同情	3.42	0.89	3.39	1.01	0.13
向社会	53.73	13.70	52.43	14.07	0.34
<b>向社会的行動</b>					
人数(56)			27		
募金意思	3.48	1.30	3.52	0.88	0.12
募金額	306.59	347.75	394.67	383.24	0.86
規範意識	3.48	0.90	3.93	0.66	2.06 *
同情	3.24	1.10	3.59	0.68	1.40
自発性	3.55	1.13	3.59	0.99	0.14

\*:  $p < .05$ , \*\*\*:  $p < .001$

**規範意識** 3要因分散分析の結果、要請者性別要因 ( $F(1, 48) = 1.11$  *n.s.*,  $\eta^2 = .02$ )、要請者性質要因 ( $F(1, 48) = 1.18$  *n.s.*,  $\eta^2 = .02$ )、参加者性別要因 ( $F(1, 48) = 0.03$  *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ ) に主効果は認められなかった。

また、要請者性別要因と参加者性別要因の交互作用もなかった ( $F(1, 48) = 0.05$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。同様に、要請者性質要因と参加者性別要因の交互作用もなかった ( $F(1, 48) = 0.04$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。しかし、要請者性別要因と要請者性質要因の交互作用に有意な傾向が見られた ( $F(1, 48) = 3.23$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .06$ )。そのため、要請者性別要因と要請者性質要因の単純主効果の検定を行った。その結果、要請者性別要因の本人条件で有意な傾向が見られた ( $F(1, 48) = 3.72$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .07$ )。しかし、要請者性別要因の類似条件では有意な差は見られなかった ( $F(1, 48) = 0.30$  *n.s.*,  $\eta^2 = .01$ )。また、要請者性質要因の男性要請者にも有意差はなかった ( $F(1, 48) = 0.27$  *n.s.*,  $\eta^2 = .01$ )。しかし、要請者性質要因の女性要請者で有意な傾向が見られた ( $F(1, 48) = 3.88$ ,  $p < .10$ ,  $\eta^2 = .07$ )。また、要請者性別要因と要請者性質要因と参加者性別要因の交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 48) = 0.07$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .00$ )。

以上から、次の二点が明らかとなった。第一に、本人条件の場合、男性要請-本人条件(募金者:  $M =$  男性 3.88, 女性 3.86)は女性要請-本人条件( $M =$  男性 3.20, 女性 3.20)よりも規範意識が高い傾向にあることが明らかとなった。第二に、女性要請者の場合、女性要請-類似条件(募金者:  $M =$  男性 3.89, 女性 3.86)

表4 本人条件の相関 (右上:男性要請 左下:女性要請)

	募金意思	規範意識	同情	自発性	向社会
募金意思	-	.47	.14	.33	-.17
規範意識	.31	-	.62	.13	.14
同情	-.51	-.26	-	.47	-.17
自発性	.52	.40	-.49	-	-.17
向社会	.00	-.27	.07	-.42	-

は女性要請-本人条件( $M =$  男性 3.20, 女性 3.20)よりも規範意識が高い傾向にあることが明らかとなった。

**同情** 3要因分散分析の結果、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった。

**募金経験の自発性と向社会的行動** 自発性では、平均値 ( $M = 3.57$ ) 以上を高群、未満を低群とした。また、向社会的行動では、平均値 ( $M = 50.83$ ) 以上を高群、未満を低群とした(表3参照)。募金意思・募金額・規範意識・同情について、自発性と向社会的行動の2群間の差異を検討するために、対応のないt検定を行った。

表5 類似条件の相関 (右上:男性要請 左下:女性要請)

	募金意思	規範意識	同情	自発性	向社会
募金意思	-	.35	.54	.87 ***	.34
規範意識	.27	-	.68 *	.44	-.18
同情	.13	.45	-	.47	-.02
自発性	.48	.15	-.12	-	.28
向社会	-.12	-.10	.04	.12	-

\*:  $p < .05$ , \*\*\*:  $p < .001$

その結果、募金意思のみ自発性高群は自発性低群よりも有意に募金への意思が高いことが明らかとなった。また、規範意識のみ向社会的行動高群よりも向社会的行動低群は有意に規範意識が高いことが明らかとなった。

### 相関分析

表4は、本人条件の男性要請と女性要請の各質問項目の相関を示す。表5は、類似条件の男性要請と女性要請の各質問項目の相関を示す。

募金意思・規範意識・同情・自発性・向社会的行動の得点間の相関関係を調べるために、ピアソンの積率相関係数を求め、Holmの調整済み無相関検定を実施した。その結果、男性要請-類似条件のみ募金意思と自発性に正の相関 ( $r = .87$   $p < .001$ )、また、規範意識と同情に

正の相関 ( $r = .87, p < .05$ ) が有意であった。したがって、男性要請-類似条件の場合、過去に自発的に募金を行った経験がある者は、募金意思が高く、また、規範意識が高い者は、同情も高いことが明らかとなった。

## 考察 仮説検証

募金額に関しては、仮説 1、仮説 2、仮説 3、仮説 4 と支持されなかった。また、募金意思では、仮説 1 は、支持されなかった。仮説 2 では、類似条件で男性募金者の場合、女性要請-類似条件 ( $M = 4.11$ ) は男性要請-類似条件 ( $M = 3.00$ ) よりも募金意思が高いことが明らかとなった。つまり、類似条件の男性募金者の場合のみで支持された。しかし、類似条件で女性募金者の場合、男性要請-類似条件 ( $M = 4.00$ ) は女性要請-類似条件 ( $M = 2.86$ ) よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。つまり、類似条件の女性募金者では、男性要請の方が、女性要請者よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。以上から、募金者は、募金要請者が同性よりも、異性の方へ募金意思が高くなることが明らかとなった。仮説 3 は、女性要請-類似条件の場合、男性募金者 ( $M = 4.11$ ) は女性募金者 ( $M = 2.86$ ) よりも募金意思が高いことが明らかとなった。つまり、類似条件でのみ支持された。仮説 4 は、男性要請-類似条件の場合、女性募金者 ( $M = 4.00$ ) は男性募金者 ( $M = 3.00$ ) よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。つまり、類似条件でのみ支持された。

研究 I から得られた結論は、募金経験のない者は、募金経験のある者に比べて、募金への意思、規範に対する意識も低く、同情することが少なく、普段の援助行動も少ない。つまり、募金経験のない者は、援助に関する全般のことが低いのである。そのため、募金の経験もないのであろう。

過去の募金に対して自発性が低い人は、自発性が高い人に比べて、募金への意思が低い。つまり、実際の募金に対して自発性の高い者と低い者では、規範に対する意識や同情、普段の援助行動は変わらないが、募金への意思だけが低い。しかし、相関を見ると、男性要請-類似条件の場合のみ募金意思と自発性に正の相関がある。以上から、募金要請者が困窮者と類似しており、男性要請者の場合、実際の募金に対して自発性の高い者は、募金をしたくなることが示唆された。また、実際の募金に対

しての自発性の高さは、募金額、規範への意識、同情、普段の援助行動とは関係が認められなかった。

普段から援助行動をしている者は、援助行動が少ない人よりも規範への意識が低い。換言すれば、規範への意識の高い者は、普段の援助行動が少ないのである。つまり、規範への意識の高さは、普段の援助行動とは関係ないのであろう。

相関分析では、男性要請者で類似条件の場合のみ、過去の募金の自発性が高い者は募金への意思も高く、また、規範への意識が高い者は、同情も高いことが示された。つまり、類似した人物で男性要請者の場合に限り、過去の自発的な募金が募金への意思に影響する。そして、同情しやすく、それにより規範への意識が高くなるということが推測される。

本人が募金要請する場合では、女性要請-本人条件よりも男性要請-本人条件の方が規範への意識が高い傾向にある。つまり、本人が募金要請するならば、男性要請者が行った方が女性要請者よりも助けたいと思う意識が高くなる。ただし、募金への意思では、本人条件で、男性要請-本人条件 (募金者:  $M =$  男性 3.75, 女性 3.43) と女性要請-本人条件 ( $M =$  男性 3.60, 女性 3.40) で差は見られない。よって、本人が募金の要請を行う場合は、男性要請者が行った方が募金者の規範への意識は高くなるが、それは募金への意思に影響を与えないことが示唆された。

女性要請者の場合では、女性要請-類似条件は女性要請-本人条件よりも規範への意識が高い傾向にある。つまり、女性要請者では、困窮者本人が募金を要請するよりも、類似した人物が募金を要請した方が募金者は助けたいと思う意識が高くなる傾向にあった。ただし、募金への意思では、女性要請-本人条件 (募金者:  $M =$  男性 3.60, 女性 3.40) と女性要請-類似条件 ( $M =$  男性 4.11, 女性 2.86) で差は見られない。以上から、女性要請者の場合は、本人がやるよりも類似した者が行った方が募金者の規範への意識は高くなる傾向はあるが、それが募金への意思に影響を与えないと考えられる。

募金者の性別による違いでは、類似条件でのみ有意な差が見られた。男性募金者の場合は、男性要請者よりも女性要請者の方が募金への意思は高い。それとは対照的に、女性募金者の場合、女性要請者よりも男性要請者の方が募金への意思は高い傾向にある。

募金要請者の性別による違いでは、類似条件でのみ有意な差が見られた。男性要請者の場合、男性募金者より

## 人はなぜ募金をするのか？

も女性募金者の方が募金への意思は高い傾向にある。それとは対照的に、女性要請者の場合、女性募金者よりも男性募金者の方が募金への意思は高い。

以上をまとめると、類似した人物が募金の要請を行う場合は、同性よりも異性の方が募金行動につながるといえる。

### 研究Ⅱ

研究Ⅰにおいて、類似条件で多くの知見が得られた。しかし、類似条件と本人条件の間に、次のような違いがあった。類似条件では、「実は私の娘の陽子も同じ病気にかかっていた。しかし、手術を受けられずに亡くなりました。」と記述されている。一方、本人条件では、亡くなったという記述はない。また、女性要請・類似条件は女性要請-本人条件よりも規範意識が高い傾向にあったことから、募金要請者の子どもが亡くなっていることに関して、募金者に影響を与えた可能性がある。そのため、「子どもが亡くなる」のではなく、生きている場合に、類似条件にどれだけの差異があるか分からない。生きているために規範への意識が低く、また、募金への意思も低い可能性もある。そこで、研究Ⅰの結果を基に、類似条件に限定し次の仮説を検証する。

仮説 5：募金要請者の子どもが死亡している条件（以降、「バッド条件」と表記する）と生きている条件（以降、「ハッピー条件」と表記する）では、バッド条件の方が募金意思や規範意識が高い。

仮説 6：募金要請者と募金者が同性よりも、異性の方が募金意思は高い。

### 方法

**調査参加者** 学生 28 名（男性 13 名、女性 15 名、平均年齢 = 20.57  $SD = 0.68$ ）であった。2017 年 7 月に実施した。

**調査計画** 募金要請者の性別要因（男性 - 女性）×募

金要請者との類似要因×調査参加者の性別要因（男性 - 女性）による 3 要因参加者間計画であった。

**刺激文** 研究Ⅰのバッド条件のシナリオを表 6 の「ですが、手術を受けることができたので、陽子は助かりました。」や「花子ちゃんと同じ病気にかかったようですが、手術をして助かったようです。」のように変更し、ハッピー条件とした。表 6 に、研究Ⅱで用いた刺激文の例を示す。

**手続き** 調査Ⅰと同じであった。

### 結果

募金額において外れ値（2000 円（男性要請・ハッピー条件 1 名））と判定されたものは、募金額のみ取り除き分析を行った。募金経験ありと募金経験なしの人数が大きく異なっていた。男性では、過去に募金を行った経験のある調査参加者は 3 人（男性要請・ハッピー条件 1 名、女性要請・ハッピー条件 2 名）で、女性では 0 人であった。募金経験なし群が少なかったため、募金経験あり群となし群での  $t$  検定を行わなかった。そのため、研究Ⅰと同様に研究Ⅱでも、以降の分析では募金経験あり群のみを対象とした。

### 分散分析

表 7 は、研究Ⅱの 4 変数に対する各条件の各項目の平均値と  $SD$  及び各条件の参加者人数である。要請者性別要因、バッド条件とハッピー条件（以降、「生死要因」と表記する）、参加者性別要因による影響を調べるために、以下の従属変数について 3 要因分散分析を行った。

**募金意思** 要請者性別要因 ( $F(1, 48) = 1.97$   $n.s.$ ,  $\eta^2 = .03$ )、生死要因 ( $F(1, 48) = 0.03$   $n.s.$ ,  $\eta^2 = .00$ )、参加者性別要因 ( $F(1, 48) = 0.08$   $n.s.$ ,  $\eta^2 = .00$ ) に主効果はなかった。また、要請者性別要因と生死要因の交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 48) = 1.82$ ,  $n.s.$ ,  $\eta^2 = .03$ )。同様に、要請者性別要因と参加者性別要因の

表 6 研究Ⅱで実際に用いた刺激文

男性要請・ハッピー条件	<p>あなたが駅前を通りかかったとき、30歳くらいのスーツ姿の男性が1人で募金活動をしていました。</p> <p>「6歳の花子ちゃんという女の子が、拘束型心筋症という心臓がだんだんと硬くなっていくという病気で苦しんでいます。実は私の娘の陽子も同じ病気にかかっていた。ですが、手術を受けることができたので、陽子は助かりました。」</p> <p>「どうやら募金を呼びかけている男性の娘（陽子ちゃん）が、花子ちゃんと同じ病気にかかったようですが、手術をして助かったようです。男性は、続けてこう呼びかけました。</p> <p>「花子ちゃんを助けるためには、アメリカで心臓の移植手術を受けるしかありません。その費用には1億円が必要で、現在、7千万円ほど集まりました。あと3千万円で花子ちゃんは手術を受けられます。花子ちゃんのためにどうか募金へのご協力をお願いします。」</p> <p>あなたが自分の財布の中身を確認したところ、小銭も合わせて5千円くらい入っていました。</p>
-------------	---

※バッド条件と異なる部分

交互作用もなかった ( $F(1, 48) = 0.81, n.s., \eta^2 = .01$ )。また、生死要因と参加者性別要因の交互作用もなかった ( $F(1, 48) = 0.52, n.s., \eta^2 = .01$ )。

しかし、要請者性別要因と生死要因と参加者性別要因の交互作用が有意であったため ( $F(1, 48) = 9.40, p < .01, \eta^2 = .15$ )、細分化し、分析を行った。

要請者性別要因 (男性要請者, 女性要請者) における生死要因と参加者性別要因の影響を調べるために、2 要因分散分析を行った。その結果、男性要請者の生死要因に主効果はなかった ( $F(1, 25) = 0.83, n.s., \eta^2 = .03$ )。同様に、男性要請者の参加者性別要因の主効果もなかった ( $F(1, 25) = 0.83, n.s., \eta^2 = .03$ )。そして、男性要請者の生死要因と参加者性別要因の交互作用で有意な傾向が見られた ( $F(1, 25) = 3.31, p < .10, \eta^2 = .11$ )。そのため、男性要請者の生死要因と参加者性別要因の単純主効果の検定を行った。その結果、生死要因の男性募金者で有意な傾向が見られた ( $F(1, 25) = 3.79, p < .10, \eta^2 = .13$ )。しかし、生死要因の女性募金者では有意な差は見られなかった ( $F(1, 25) = 0.41, n.s., \eta^2 = .01$ )。また、参加者性別要因のバッド条件で有意な傾向が見られた ( $F(1, 25) = 3.79, p < .10, \eta^2 = .13$ )。しかし、参加者性別要因のハッピー条件では有意な差は見られなかった ( $F(1, 25) = 0.41, n.s., \eta^2 = .01$ )。また、女性要請者の生死要因に主効果はなかった ( $F(1, 23) = 0.98, n.s., \eta^2 = .03$ )。同様に、女性要請者の参加者性別要因の主効果もなかった ( $F(1, 23) = 0.16, n.s., \eta^2 = .01$ )。そして、男性要請者の生死要因と参加者性別要因の有意な交互作用が見られた ( $F(1, 23) = 6.04, p < .05, \eta^2 = .20$ )。そのため、女性要請者の生死要因と参加者性別要因の単純主効果の検定を行った。その結果、生死要因の男性募金者で有意な差が見られた ( $F(1, 23) = 5.94, p < .05, \eta^2 = .20$ )。しかし、生死要因の女性募金者では有意な差は見られなかった ( $F(1, 23) = 1.08, n.s., \eta^2 = .04$ )。また、参加者性別要因のバッド条件で有意な差が見られた ( $F(1, 23) = 5.01, p$

$< .05, \eta^2 = .17$ )。しかし、参加者性別要因のハッピー条件では有意な差は見られなかった ( $F(1, 23) = 1.79, n.s., \eta^2 = .06$ )。

生死要因 (ハッピー条件のみ) における要請者性別要因と参加者性別要因の影響を調べるために、2 要因分散分析を行った。その結果、男性要請者の生死要因に主効果は有意傾向であった ( $F(1, 21) = 3.35, p < .10, \eta^2 = .13$ )。一方、ハッピー条件の参加者性別要因に主効果はなかった ( $F(1, 21) = 2.08, n.s., \eta^2 = .08$ )。

参加者性別要因 (男性募金者, 女性募金者) における要請者性別要因と生死要因の影響を調べるために、2 要因分散分析を行った。その結果、男性募金者の要請者性別要因に主効果はなかった ( $F(1, 25) = 0.14, n.s., \eta^2 = .00$ )。同様に、男性募金者の生死要因の主効果もなかった ( $F(1, 25) = 0.44, n.s., \eta^2 = .01$ )。しかし、男性募金者の要請者性別要因と生死要因の有意な交互作用が見られた ( $F(1, 25) = 10.71, p < .01, \eta^2 = .30$ )。そのため、男性募金者の要請者性別要因と生死要因の単純主効果の検定を行った。その結果、要請者性別要因のバッド条件で有意な差が見られた ( $F(1, 25) = 5.09, p < .05, \eta^2 = .17$ )。同様に、要請者性別要因のハッピー条件で有意な差が見られた ( $F(1, 25) = 3.71, p < .05, \eta^2 = .14$ )。また、生死要因の男性要請者で有意な傾向が見られた ( $F(1, 25) = 3.46, p < .10, \eta^2 = .10$ )。同様に、生死要因の女性要請者で有意な差が見られた ( $F(1, 25) = 7.62, p < .05, \eta^2 = .21$ )。また、女性募金者の要請者性別要因に主効果は認められなかった ( $F(1, 23) = 2.41, n.s., \eta^2 = .09$ )。同様に、女性募金者の生死要因の主効果もなかった ( $F(1, 23) = 0.14, n.s., \eta^2 = .01$ )。また、要請者性別要因と生死要因の交互作用も有意ではなかった ( $F(1, 23) = 1.34, n.s., \eta^2 = .05$ )。

以上から、次の三点が明らかとなった。第一に、男性要請者の場合、男性募金者で男性要請・ハッピー条件 ( $M = 4.00$ ) は男性要請・バッド条件 ( $M = 3.00$ ) より

表7 研究Ⅱの各項目の平均値とSD及び各条件の参加者人数

	男性要請-ハッピー条件 (15)		女性要請-ハッピー条件 (13)		男性要請-バッド条件 (15)		女性要請-バッド条件 (13)	
	男性参加者 (6)	女性参加者 (9)	男性参加者 (7)	女性参加者 (6)	男性参加者 (7)	女性参加者 (6)	男性参加者 (7)	女性参加者 (6)
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
募金意思	4.00	0.00	3.67	0.87	2.60	1.34	3.50	1.38
募金額	332.00	421.57	3.67	402.97	260.00	415.93	533.33	512.51
規範意識	3.60	0.89	3.67	0.97	3.20	1.10	4.00	0.00
同情	3.20	0.84	3.67	0.53	3.00	1.00	3.33	1.03

## 人はなぜ募金をするのか？

も募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。第二に、女性要請者の場合、男性募金者で女性要請-バッド条件 ( $M=4.11$ ) は女性要請-ハッピー条件 ( $M=2.60$ ) よりも募金意思が高いことが明らかとなった。第三に、ハッピー条件の場合、男性要請-ハッピー条件 ( $M=$  男性 4.00, 女性 3.67) は女性要請-ハッピー条件 ( $M=$  男性 2.60, 女性 3.50) よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。

**募金額** 3要因分散分析の結果、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった。

**規範意識** 3要因分散分析の結果、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった。

**同情** 3要因分散分析の結果、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった。

**募金経験の自発性と向社会的行動** 自発性では、平均値 ( $M=3.56$ ) 以上を高群、未満を低群とした。また、向社会的行動では、平均値 ( $M=52.24$ ) 以上を高群、未満を低群とした (表 8 参照)。募金意思・募金額・規範意識・同情について、自発性と向社会的行動の 2 群間の差異を検討するために、対応のない  $t$  検定を行った。

表 8 自発性と向社会的行動の平均値と SD および人

	高群		低群		t 値
	M	SD	M	SD	
<b>募金経験の自発性</b>					
人数(25)	17		8		
募金意思	3.71	0.96	3.00	1.12	1.10
募金額	480.00	396.99	282.50	415.87	1.07
規範意識	3.88	0.76	3.25	0.83	1.81 †
同情	3.24	0.73	3.38	0.86	0.40
向社会	54.29	13.63	47.88	14.69	1.03
<b>向社会的行動</b>					
人数(25)	11		14		
募金意思	3.27	1.05	3.64	1.04	0.84
募金額	365.45	408.02	453.33	415.88	0.49
規範意識	3.82	0.83	3.57	0.82	0.71
同情	3.18	0.83	3.36	0.72	0.54
自発性	3.73	0.96	3.43	1.12	0.68

†:  $p < .10$

その結果、規範意識のみ自発性高群は自発性低群よりも規範意識が高い傾向にあることが示された。また、向社会的行動では、各質問項目で有意差はなかった。

### 相関分析

表 9 にハッピー条件の男性要請と女性要請の各質問項目の相関を示す。

表 9 ハッピー条件の相関 (右上:男性要請左下:女性要請)

	募金意思	規範意識	同情	自発性	向社会
募金意思	-	.38	-.33	-.13	-.25
規範意識	.21	-	.32	.02	.01
同情	.28	.09	-	.13	.38
自発性	.54	.68	-.19	-	.06
向社会	-.28	.29	-.55	.36	-

募金意思・規範意識・同情・自発性・向社会的行動の得点間の相関関係を調べるために、ピアソンの積率相関係数を求め、Holm の調整済み無相関検定を実施した。その結果、各条件で有意な相関は見られなかった。

### 考察

#### 仮説検証

規範意識に関しては、仮説 5、仮説 6 と支持されなかった。

仮説 5 は、男性募金者の場合、女性要請-バッド条件 ( $M=4.11$ ) は女性要請-ハッピー条件 ( $M=2.60$ ) よりも募金意思が高いことが明らかとなった。しかし、男性要請-ハッピー条件 ( $M=4.00$ ) は男性要請-バッド条件 ( $M=3.00$ ) よりも募金意思が高い傾向にあることが明らかとなった。女性募金者では、有意な差は見られなかった。以上のことから、女性要請者×男性募金者の場合でのみ支持された。つまり、男性募金者は、女性要請者では、子どもが死亡している場合に募金への意思は高くなるが、募金要請者が同じ男性では、子どもが生きている場合に募金への意思が高くなるのである。

仮説 6 は、ハッピー条件の男性募金者の場合、男性要請-ハッピー条件 ( $M=4.00$ ) は女性要請-ハッピー条件 ( $M=2.60$ ) よりも高いことが明らかとなった。また、ハッピー条件の女性募金者の場合では、有意な差は見られなかった。ただし、バッド条件では、男性募金者の場合、女性要請-バッド条件 ( $M=4.11$ ) は男性要請-バッド条件 ( $M=3.00$ ) よりも募金意思が高い。また、女性募金者の場合では、男性要請-バッド条件 ( $M=4.00$ ) は女性要請-バッド条件 ( $M=2.86$ ) よりも募金意思が高い傾向にある。男性要請-バッド条件の場合、女性募金者 ( $M=4.00$ ) は男性募金者 ( $M=3.00$ ) よりも募金意思が高い傾向にある。また、女性要請-バッド条件の場合、男性募金者 ( $M=4.11$ ) は女性募金者 ( $M=2.86$ ) よりも募金意思が高い。以上のことから、仮説 6 はバッド条件のみ支持された。つまり、男性募金者は、募金要請者の子どもが生きている場

合では、女性要請者よりも男性要請者に対して募金への意思が高くなるが、死亡している場合では、反対に男性要請者よりも女性要請者に対して募金への意思が高くなるのである。

研究Ⅱの結論は、子どもが活着している場合、過去の募金に対して自発性が低い者は、自発性が高い者に比べて、規範への意識が低い傾向にあることである。また、過去の募金に対しての自発性の高さは、自発性の低い者に比べて募金額、募金への意思、同情、普段の援助行動は変わらない。そして、普段から援助行動をしている者と援助行動が少ない者には差がないということが分かった。以上の結果は、募金要請者が困窮者と類似して子どもが活着している場合、実際の募金に対して自発性の高い者は、助けたいと思う意識が高くなる傾向にあることを示唆する。また、実際の募金に対しての自発性の高さは、募金額、規範への意識、同情、普段の援助行動とは関係なく、普段の援助行動の多さも関係ないようである。

相関分析では、子どもが活着している場合は、募金への意思、規範への意識、同情、過去の募金に対しての自発性、普段の援助行動に相関がないということが明らかとなった。子どもが活着している場合では、男性要請-ハッピー条件は女性要請-ハッピー条件よりも募金への意思が高い傾向にある。さらに、男性募金者では、男性要請-ハッピー条件は女性要請-ハッピー条件よりも募金への意思が高い。よって、困窮者と類似した人物の子どもが活着している場合は、男性が募金を要請し、さらに、男性募金者であったならばより募金への意思が高くなるといえる。

募金者の性別による違いでは、男性募金者の場合では、男性要請-ハッピー条件は男性要請-バッド条件よりも募金への意思が高い傾向にある。つまり、困窮者と類似した人物が募金を要請し、且つ男性であれば、子どもが死亡している場合よりも子どもが活着している場合の方が、男性は募金を行う。また、女性募金者の場合では、女性要請-バッド条件は女性要請-ハッピー条件よりも募金への意思が高い。つまり、困窮者と類似した人物が募金を要請し、且つ女性であれば、子どもが活着している場合よりも子どもが死亡している場合の方が、男性は募金を行う。そして、男性募金者は、募金要請者の子どもが活着している場合では、女性要請者よりも男性要請者に募金への意思が高くなるが、死亡している場合では、反対に男性要請者よりも女性要請者に募金への意思が高くなる。

る。

## 総合考察

### 募金経験の有無

本研究の結果、募金額に関しては、募金経験のない者は、募金経験のある者に比べて、募金への意思、規範に対する意識も低く、同情することが少なく、普段の援助行動も少ないことがわかった。

高木 (1998) は、潜在的援助者の「寄付・奉仕行動」の促進要因の特徴について、三要因を示している。募金の経験がないのであれば、第一の「援助規範を内在化し、それを指示する援助を行う責任を積極的に受容している。そして、それを実行する能力を備えている。」は備えていないと推測される。また、第二の「援助の成功経験があり、良い気分になったことがある。または、援助を受け、助かった経験があることである。」では、募金に関しては、募金経験がないため、募金経験の成功もなく、良い気分になったこともないと考えられる。第三の「援助的性格を持っており、潜在的被援助者に関心を向けやすいよい気分・感情状態ある。そして、潜在的被援助者が助けてあげたいと思わせる好ましい特徴を持っていることである。」では、募金の経験がないことから、援助的性格を持っているとは考えられない。つまり、募金経験のない者は、援助に関する全般のことが低くだけでなく、募金に関しての促進要因がないため、募金の経験もないと推測される。

### 相関分析

研究ⅠとⅡでは、男性要請-バッド条で、過去の募金の自発性が高い者は、募金への意思も高いこと、また、規範意識が高い者は、同情も高いことが明らかとなった。中澤 (1993) によれば、同情 (中澤 (1993) では、「共感性」と表記されている。本研究では、「共感性」と「同情」をほぼ同義とみなした) の高い者は、日常場面で多くの援助を行っていることが分かっている。そして、同情は、知人に対する援助においては同情の高低は関係なく、見ず知らずの人に対する援助に働くことが明らかとなっている。また、Mehrabian & Epstein (1972) の研究でも、男性よりも女性の方が同情的

(Mehrabian & Epstein (1972) では、「共感的」と表記) であり、同情の得点が低い者よりも高い者の方が、援助行動は多いと報告されている。そして、松井 (1981) によれば、情動的共感性 (同情) では、同情の高い者ほど多くの援助経験があり、感情的に他者からの

## 人はなぜ募金をするのか？

影響を受けやすい者ほど、募金をよく行っていた。

本研究では、分散分析の結果、募金要請者の性別による差異はなく、また、同情と向社会的行動に相関はなかった。そのため、中澤 (1993) や Mehrabian & Epstein (1972) , 松井 (1981) の研究との整合性は認められなかった。しかし、男性要請-バッド条件で規範意識が高い者は、同情も高いことが明らかとなっている。同情が規範意識として現れ、援助行動を起こすとする松井 (1981) と合わせて考えると、募金要請者の子どもが死亡していることに関して、同情が規範意識として現れたものの、援助行動にまで繋がらなかったと推測される。本研究では場面想定法による質問紙法を用いたため、現実場面におけるフィールド実験のように、現実味を帯びていない影響かもしれない。

また、男性要請-バッド条件で過去の募金の自発性が高い者は、募金への意思も高いことが明らかとなった。高木 (1998) によれば、潜在的援助者の「寄付・奉仕行動」の促進要因の一つは、「援助的性格を持っており、潜在的被援助者に関心を向けやすいよい気分・感情状態ある。そして、潜在的被援助者が助けてあげたいと思わせる好ましい特徴を持っていることである。」としている。そして、自発性は、過去の募金の自発性を問うているので、自発性が高いということは、援助的性格を持っていると考えられる。そのため、困窮者と類似した男性の子どもが死亡していることに関して、自発性（援助的性格）と募金への意思に相関があったのではないだろうか。

大川 (2016) の研究とは、男性要請-バッド条件の規範意識と同情の相関のみ一部整合性があった。ただし、大川 (2016) では、各条件を合算して相関を算出しているため、本研究と一部しか整合性はなかったのではないかと推測される。そのため、全体的な相関係数を調べるために、研究Ⅰの4条件と研究Ⅱの2条件を合算し、各質問項目の得点間のピアソンの積率相関係数を求め、Holm の調整済み無相関検定を実施した。表 10 は、研究Ⅰと研究Ⅱのデータを合算した、各質問項目の相関係数を示したものである。

無相関検定の結果、募金意思と規範意識に正の相関、募金意思と自発性に正の相関、規範意識と同情に正の相関、規範意識と自発性に正の相関があった。

表 10 各質問項目の相関（研究Ⅰと研究Ⅱの合算）

	募金意思	規範意識	同情	自発性	向社会
募金意思	-	.32 *	.13	.48 ***	-.06
規範意識		-	.35 **	.30 *	-.02
同情			-	.13	-.06
自発性				-	.09
向社会					-

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

以上から、次の四点が明らかとなった。第一に、規範意識が高い者は、募金への意思も高いことが明らかとなった。第二に、過去に自発的に募金を行った経験がある者は、募金への意思が高いことが明らかとなった。第三に、規範意識が高い者は、同情も高いことが明らかとなった。第四に、規範意識が高い者は、過去に行った募金が自発的なことが明らかとなった。

大川 (2016) の研究の各質問項目間の相関では、規範性と同情には正の相関があり、また、募金意思と規範性で正の相関に有意傾向が見られ、向社会的行動以外に整合性がある。そのため、募金意思と規範意識、同情と規範意識で大川 (2016) の研究と整合性があるといえる。

また、同情と規範意識、規範意識と募金意思に相関が見られたことから、松井 (1981) の研究の「同情が規範意識として現れ、援助行動を起こす」という点で、整合性があったといえる。

以上から、人が募金をするのは、同情から規範への意識が高まり、募金するのではないかと推測される。また、規範への意識から自発性が高まっているのであろう。

### 募金意思・募金額・規範意識・同情

大川 (2016) の研究で、募金額、規範意識、同情で有意な差は認められなかった。本研究では、類似した人物よりも本人が募金を要請した場合に援助全般が向上すると考えられた。しかし、研究Ⅰと研究Ⅱを併せても募金額と同情には有意な差は認められなかった。また、本人条件と類似条件を比べて有意な差が見られたのは、規範意識だけであった。そして、女性要請者では、困窮者本人が募金を要請するよりも、類似した人物が募金を要請した方が助けたいと思う意識が高い傾向にあるということが分かった。

困窮者本人の募金要請では、男性要請者がした方が規範への意識は高まるが、その他の募金に影響を与えないことが示された。

大川 (2016) の研究では、募金意思のみ有意な差が認められ、女性要請者の場合、募金要請者と困窮者との類似性が募金に影響することが示唆された。本研究では募金意思は、類似条件 (バッド条件、ハッピー条件) のみ募金意思に有意な差が見られた。

バッド条件では、類似した人物が募金の要請を行う場合は、同性よりも異性の方が募金への意思が高くなることが分かった。バッド条件のみこの様な結果になったため、子どもが死亡していることに対して、同性に対して厳しい判断をするが、異性に対しては優しい判断をするのかもしれない。つまり、高木 (1998) の促進要因の一つである「援助的性格を持っており、潜在的被援助者に関心を向けやすいよい気分・感情状態ある。そして、潜在的被援助者が助けてあげたいと思わせる好ましい特徴を持っていることである。」がある。異性には、子どもが死亡している募金要請者に関心を向けやすいよい気分・感情状態あるが、同性に対しては、関心を向けやすいよい気分・感情状態にはなれないのであろう。

ハッピー条件では、類似した人物が募金の要請を行う場合は、男性要請者の方が募金への意思が高くなることが分かった。さらに、男性要請者で男性募金者であったならばより募金への意思が高くなることが分かった。

バッド条件とハッピー条件を比べると、男性募金者は、募金要請者の子どもが活着している場合では、女性要請者よりも男性要請者に募金への意思が高くなるが、死亡している場合では、反対に男性要請者よりも女性要請者に募金への意思が高くなることが分かった。

大川 (2016) の研究では、女性要請者の場合、募金要請者と困窮者との類似性が募金に影響することが明らかとなった。そして、類似性が募金に影響することは本研究でも同じであった。しかし、女性要請者の場合だけではなく、男性要請者の場合でも募金者は募金への意思と規範への意識に影響されることが新たに分かった。

Schwartz (1973) によれば、潜在的援助者が男性で、援助要請者が自分と同じ人種の場合、男性よりも女性に対して援助率が高い結果となった。しかし、潜在的援助者が女性で、被援助要請者が自分と同じ人種の場合、男性であっても女性であっても同程度の援助率であった。また、本研究 I と II の募金意思・規範意識・同情・自発性・向社会的行動のデータを合算した相関の結果から、人が募金をするのは、同情から規範への意識が高まり、募金するのではないかと推測された。つまり、類似条件で男性募金者では、女性要請者の子どもが死亡している

場合、同情から規範への意識が高まり、募金への意思に繋がったのではないのだろうか。そのため、女性要請者の子どもが活着している場合では、子どもが助かっているため、女性要請者に対して同情しないことから、募金への意思が低い結果になったのではないかと考えられる。逆に、男性募金者では、男性要請者の子どもが死亡している場合、子どもを守れなかったという、同じ男性としてネガティブな感情を抱いたのではないだろうか。高木 (1998) の「寄付・奉仕行動」の抑制要因の一つである

「援助を求める原因を潜在的被援助者に帰属し、潜在的被援助者自身に解決することを期待し、非援助に伴うと予想されるサンクションを軽視している。」に当てはまったのではないかと考えられる。つまり、男性は子どもを守るものという意識が募金者にあり、困窮者と類似した人物に対して責任を帰属したため、募金への意思が低いのではないかと推測される。そして、促進要因の一つである「援助的性格を持っており、潜在的被援助者に関心を向けやすいよい気分・感情状態ある。そして、潜在的被援助者が助けてあげたいと思わせる好ましい特徴を持っていることである。」がある。男性募金者で、男性要請者の子どもが活着している場合、子どもを守ったということから、ネガティブ感情がなく促進要因が働き、募金への意思が高くなったのではないかと考えられる。

ただし、Schwartz (1973) によれば、潜在的援助者が女性で、被援助要請者が自分と同じ人種の場合、男性であっても女性であっても同程度の援助率だったことが明らかとなっている。しかし、本研究では、女性募金者でも、男性要請者と女性要請者で募金への意思に差異が見られた。これは、Schwartz の研究が 1973 年であるため、時代の変化かもしれない。

結論として、困窮者本人と困窮者と類似した人物を比較した場合、困窮者本人というよりも、類似した人物の性別や募金内容 (子どもの生死) の方が潜在的援助者に影響を与えるということである。本研究では、困窮者本人が募金を要請するよりも、募金要請者が困窮者と類似した人物の状況や募金者の性別、募金要請者の性別を組み合わせて実施する方がよいことが示された。

### 募金経験の自発性の高低

本人条件とバッド条件を併せた結果では、過去の募金に対して自発性が高い者は、自発性が低い者に比べて、募金への意思が高いことが分かった。しかし、相関を見ると、男性要請-バッド条件の場合のみ募金意思と自発性に相関があった。つまり、困窮者と類似した人物で子

## 人はなぜ募金をするのか？

子どもが生きており、男性要請者の場合には、実際の募金に対して自発性の高い者は、募金への意思が高いということである。また、実際の募金に対しての自発性の高さは、募金額、規範への意識、同情、普段の援助行動とは関係ないようである。このような結果になったのは、高木（1998）によれば、潜在的援助者の「寄付・奉仕行動」の抑制要因の一つに、「援助の失敗により、嫌な気分になったことがある。または、援助要請が拒否された、援助されたことにより事態が悪化した経験ある。」がある。過去の募金の自発性が低いということは、募金に対して嫌な気分を経験したのかもしれない。そのため、自発性が高い者に比べて、自発性の低い者は募金への意思が低かったのかもしれない。

ハッピー条件の結果では、過去の募金に対して自発性が高い者は、自発性が低い者に比べて、規範への意識が高い傾向にあるということが分かった。つまり、困窮者と類似した人物で子どもが活着している場合には、実際の募金に対して自発性の高い者は、低い者に比べて、助けたいと思う意識が高い傾向にあるということである。また、実際の募金に対しての自発性の高さは、募金額、規範への意識、同情、普段の援助行動とは関係ないようである。

高木（1998）によれば、潜在的援助者の「寄付・奉仕行動」の抑制要因の一つに、「援助を求める原因を潜在的被援助者に帰属し、潜在的被援助者自身に解決することを期待し、非援助に伴うと予想されるサンクションを軽視している。」がある。過去の募金の自発性が低いということは、困窮者自身が解決する問題だと考え、また、募金されないことによる問題を軽視しているのかもしれない。そのため、自発性が高い者に比べて、自発性の低い者は規範への意識が低かったのかもしれない。

また、研究Ⅰ、Ⅱの募金意思・規範意識・同情・自発性・向社会的行動のデータを合算した相関では、自発性と募金意思、自発性と規範意識に正の相関が見られた。以上のことから、実際の募金に対しての自発性の高さは、募金額、同情、普段の援助行動とは関係ないようである。また、困窮者と類似した人物で子どもが活着している場合には、規範への意識が、困窮者と類似した人物で子どもが活着しており、男性要請者の場合には、募金への意思に差異があることが分かった。

### 向社会的行動の高低

本人条件とバッド条件を併せた結果では、普段から援助行動をしているものは、援助行動が少ない者よりも規

範への意識が低いことが分かった。つまり、規範への意識の高さは、普段の援助行動とは関係ないのである。

ハッピー条件では、普段から援助行動をしている者と援助行動が少ない者には差がなかった。高木（1998）は、潜在的援助者の「寄付・奉仕行動」の促進要因の一つとして、「援助規範を内在化し、それを指示する援助を行う責任を積極的に受容している。そして、それを実行する能力を備えている。」と述べている。向社会的行動が高いということは、普段から多くの援助をしていることを意味する。

しかし、本研究では、普段の援助行動が少ない者の方が、規範意識が高かった。そのため、援助行動の少ない者は、規範意識を内在化しているが、それを指示する援助を行う責任を積極的に受容してはおらず、それを実行する能力を備えていないのであろう。また、研究Ⅰ、Ⅱの募金意思・規範意識・同情・自発性・向社会的行動のデータを合算した相関では、規範意識と同情に正の相関が見られた。

以上のことを踏まえると、普段から援助を行っていない者は、死などのネガティブな情報に規範への意識が働き、助かったなどのポジティブな情報には規範への意識が働かないのではないだろうか。また、それ以外の募金意思、募金額、同情、自発性とは関係ないようである。

### 今後の展望と課題

研究Ⅰと研究Ⅱでは、場面想定法を用いているが、現実の募金行動や募金額と異なる可能性があるため、現実場面におけるフィールド実験を行うことが必要である。また、本研究では、困窮者の親が募金を要請する場合を本人条件とした。しかし、実際に困窮者本人、本研究であれば、拘束型心筋症の病を患っている「花子ちゃん」が募金を要請した場合と困窮者の親が募金を要請した場合で影響が異なる可能性がある。今後は、現実場面におけるフィールド実験や困窮者自身が募金を要請した条件と困窮者の親が募金を要請した条件の差異を調査することが必要であらう。

### 謝辞

本研究は第一著者が2017年度東海学院大学人間関係学部心理学科の卒業論文として執筆した原稿に加筆修正を加えたものである。調査に参加して下さった参加者の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- Hannah, H., & Midlarsky, E. (1989) School performance of siblings of the retarded. Paper presented at the meeting of the American Psychological Association, Washington, D. C.
- 松井豊 (1981). 援助行動の構造分析 心理学研究, 52, 226-232.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972) A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- 中澤清 (1993) 向社会的行動における共感能力と援助コストの関係に関する研究 人文論究, 43, 98-109.
- 大川朝世 (2016) どんな人が呼びかけると募金してもらえるのか? —募金要請者の性別及び困窮者との類似度が募金意思に与える影響— 富山福祉短期大学 社会福祉学科社会福祉専攻卒業論文 (未公刊).
- Schwartz, S. H. (1973) Normative explanations of helping behavior: A critique, proposal, and empirical test. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 349-364.
- 高木修 (1982) 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, 23, 137-156.
- 高木修 (著)・安藤清志・松井豊 (編) (1998) セレクション社会心理学 7 人を助ける心 —援助行動の社会心理学— サイエンス社.
- How do the sex and situations of donees influence the donors' behavior?  
Tokiyo Okawa and Taeko Ogawa

